

# 言 頭 卷



## 最終兵器と木刀と

気仙医師会 会長  
滝田医院 院長  
滝 田

有

今年も多くの年賀状をいただいた。万一欠礼があった方はご容赦いただきたい。  
開業する前に共に働いた某科の医師からの一枚の賀状が気になった。曰く「一内の医者は最終兵器だ」と。

一内とは旧第一内科。循環器、呼吸器を専攻する私の出身医局である。医療を病魔との闘いと捉えての多分褒め言葉なのだろうけれども、その反面アグレッシブな治療を擲擧しているようにも取れる。勤務医時代の私も、患者さんの最期まで諦めずに治療をした記憶がある。

今、開業医の私はどうだろう。昔に比べ諦めが早くなった。具体例を挙げれば長くなるし問題も生ずるので、自嘲を込めて最終兵器の対極にある一本の木刀とだけ言う。

七年前の今時分、私はくも膜下出血で倒れた。「死なない程度の中途半端な大病をした医者は名医」、かの日野原先生は言う。最終兵器より木刀の方が病人の気持ちかわかるのかもしれないが、大病をしたから皆が木刀になるわけでもない。

勤務医時代に比べて患者さんの近くに居る感覚が強い。家族や家庭環境までわかることが多い。知らなくとも地元の職員が教えてくれる。これを「全人的医療」というのか。

在宅医療や多職種連携は結構だが、あまりに肩肘張りすぎだ。昔の田舎医者は平然と往診をしたし、人望があれば人は集まる。最終兵器より人の息遣いを計る木刀で結構。

お上が唱える理想の医療とは田舎医者は須らく木刀状態に戻れという事だろう。たまには通常兵器くらい欲しくなるが木刀で我慢しろということか。

ただ、理想とされている英国のG P制度には問題が多い事を肝に銘じるべきだろう。最終兵器は誰が使おうと戦果は同じだが木刀は使い手に拠る。